

『武道伝来記』論 その二

佐々木昭夫

七

巻二に入ると最初の第一「思ひ入吹女尺八」では直前巻一の第四「内儀の利發は替た姿」で高揚した語り手、いや作者の気分がそのままの強さで続いていることがはつきりと感じられる。前話での安川権之進、細井金太夫とそれぞれの妻の精神と行動への讚美、それへの作者の自己投入は「思ひ入吹女尺八」の女主人公小督への作者西鶴の姿勢にそのまま継続している。しかも自己の創作した昨中人物に対する作者自身の人間的関心 憎悪、嫌悪ではなく讚美 は以後も時折顔を出す、巻一の第四「内儀の利發は替た姿」と巻二の第一「思ひ入吹女尺八」の二話におけるほど直截で、何の屈折もなくテクストの表面にそのまま露呈されているような一篇はこれ以後にはない。特にはつきりしているのはすぐ次の巻二の第二「見ぬ人貞に宵の無分別」との落差の大きさである。

その事を考える前に「思ひ入吹女尺八」の女主人公に対する作者の人間的な共感が並大抵のものではないことを見ておく。村之助が藪垣のすき間から隣屋敷の庭園をのぞいた時この青年の目に

映った、つまり作品に最初に登場した小督の姿はこう書かれる。

東の池の溜水のきよげに棚橋のかゝる所に隣屋敷の息女と見へて。紋羅のしろぎに紅の裏を付檜扇のちらしがた大振袖のゆたかに紫系の組帯しどけなくむすびて乱れ髪の中程を金の紙の平髻にしめよせ房付團に梶の葉見えしは。けふ織女の哥を手向ならんと思ふに案のごとく沢水に浮て立歸らるゝ面影天人の生移しかと心も空になり

西鶴では服装の具体的な綱目が長々と列挙されている場合、その意味としてはその人物がこれから作品内で重要な役割を果たすことを前もって読者に告げ、読者の関心をこの人物に向けさせるという事がまずある。西鶴は意味なく最新流行の服装を描いて得意になっているという事はなさそうである。それに「紋羅」「檜扇のちらしがた」「組帯」などの意味するところは現在では不明である。残されている現物を目にしたとしても何もわからない。西鶴の十年後二十年後にはまだ分かつたろうが全く別の性格を持ち、最新流行どころか、いかにも古ぼったく野暮と感ぜられたか

も知れない。だが西鶴という作家はそのようなことは先刻承知していたのではないが。

この服装描写で二つのことが我々今日の読者にも否応なしに強く感じられる。まずその華麗な色彩である。「しろき」「紅」「紫糸」「金の紙」そして「乱れ髪」からは黒が「梶の葉」からは緑が必然的に連想される。例えば「紫色の組帯」なるものが十年後には流行遅れになったような事があるうがなかるうが、そんなことには関係なく紫という色彩そのものは不変である。

もちろん服装、特に女性の服装をくわしく描けば多くの色彩を示す形容詞名詞がテクストに表われるのは当然である。だがここでは背景が晩夏初秋の夕暮れどきという、色彩感には最も乏しい季節が選ばれている。『源氏物語』「若菜上」の巻の終わり、柏木が女三宮を見てしまった時のように春たけなわの夕べではない。すべてが灰色につつまれた背景のうちに鮮やかな色彩で呈示されるこの女性の姿は読者の印象に強く刻印せられる。しかも舞台としてはこの女性呈示のくだりはまず「東の池の溜水のきよげに」最後は「案のごとく沢水に浮て」と水の語にはさまれている。これは単に初秋の夕べの涼しさを強めるばかりでなく特に前の方は「きよげに」の語に連なるから、この少女に清水のようなきよらかさの性格も軽く付与している。

女主人公呈示でもうひとつ読者が感ぜずにはられないのは「大振袖のゆたかに」「しどけなくむすびて」「乱れ髪」等の語の暗示するものである。ゆたかな大振袖とはこの服装列挙のうち、今日の読者にも当時の意味とほぼ同様の意味の感じ取られる数少い例だろうが、それよりもここでは傍点を付した三箇の形容語そのものが読者にふとある印象を与える。この色彩豊かに派手な身なりの少女はなにかある大胆さ、自己主張が強く積極的な性格、個性

の強さ、といった屬性を持つていることを暗示している。もちろんここではまだ確実なものとして示されるわけではなく、たとえ読み進めるに従ってそれと正反対のおとなしい性格と知ったとしても怪訝に思う者はいるまいが。しかしこの少女、ただの大胆で勝ち気な娘どころではなく類稀な強い性格の持ち主と知ったとき、これらの三語もそうした超俗性、非凡さを読者にすんなりと受け入れさせるのにある役割を果たすこととなる。

ところで西鶴では他にも見られるが、少女の顔立ちについては一語も語られていないことに注意すべきである。村之助の目に「天人の生移しか」と映じ、村之助はただ茫然としてしまったことが書かれるだけだ。「心も空になり」。読者はそれを知らされても驚くようなことは全くない。それほどこの女人呈示のくだりは強力に一人の個性をそなえた美女の姿を読者に印象づける。美女の容貌を刻明に描写した場合、たとえそれが珍しく成功し、多くの読者に大凡同一の顔立ちが思い浮かぶということがあったにしても、物語・小説の人物としては成功したと言えないのではないか。この場合の西鶴のように容貌の記述なしに具体的な一人の美女が読者の内部に活きるとき、その女性がどんな運命に陥ろうともその姿を読者は見失うことがない。小督の「沢水に浮て立歸らるゝ面影」は直後の村之助と手を取り合った時ばかりでなく、必死に激しく愛しあった時、真冬に青梅をほしがったとき、男装して深編笠の姿となり尺八を吹いて旅するとき等以後のすべての姿と矛盾しない。作中人物が活きるとはまさにこういう事かと思わせる。

以上この作品にはじめ出現したときの小督の姿は作者西鶴が細心の注意を払って書き上げたものと判断できる。そしてそのことは女主人公であるこの少女への作者自身の讚美の念がいかに強い

かをすでに示している。

引き続き少年村之助と少女小督の恋の経過を描く部分はその筆自体に二人の若い恋人達への共感が溢れている。この恋はまことに進行が速く直接的で何のまわり道もなく一直線に灼熱するから、西鶴特有の疾走する文体がこの上なく適合する。

天人の生移しかと心も空になり前後かまはず詞をかけ慮外ながらあの鞆にお手そへられてこなたへ返し給はれといへば。草分衣に露もいとほず鞆を手にふれて聲の通ふ所へさし出し給へる手をしめて。互ひに面を見合ける。恋のはじめなれ。其内にする女の女のアまた来れば。村之助是非なく立歸り装束ぬぎ捨各々より跡に残り又竹垣をみれば。彼娘も殿めつらしく恋をふくみかさねて花園に立出しにわりなく物いひかはして。筆にて心をかよはず迄もなく忍びてゆかばといへばそれをいやとはいはぬ女と。男に約束深く闇になる夜を待て。裏道より高塀をこへ身を捨て通へば女も偽りなく猿戸の鑰を盗出し人しれず我ねまに引入ふたりが命をかけて。二世迄かはるなかはらじと互ひに小指を喰切。其血をひとつに絞り出し女は男の肌着に誓紙をかけば男は女の下着にかきかはして。後には恋の詞も盡て逢たばに物はいはず涙に更て別れを惜み次才。につのるは此道のならひぞかし。情の日数かさなるを天鷲兎の枕より外に知者もなかりしに思ひの種となりて雪中の花に見ながら青梅もがなとない物ずきをして腹臑おかしげになりぬ。

蹴鞠の夕べに初めて出逢ったが、まりを手渡してくれるとき相手の手をにぎってしまい、互いに相手の顔を見つめ合ったのが

「恋のはじめ」だったという。ところがほんのわずかの時間において二人は言葉かわし、それも「忍びててゆかばといへばそれをいやとはいはぬ女と」と密会の約束という。恋の経過とは言っても、両者とも立ちどまって自らをふり返るなどということは全くなく最短の道すじをひたむきに相手目かけてつつ走る、そうした恋なのだ。「筆にて心をかよはず迄もなく」の語は重要である。恋文はいかに純粹な気持ちで書かれるにせよなんとか相手の気をひこうとか、相手の気にいられようとかいう雑念が入る。書いているうちに相手の恋心の強さに対する疑念も湧いてこよう。これはそうした余計な要素から完全に解放された奇蹟的な相思相愛である。作者が二人の平等性を意図していることはこの一文を見れば明らかである。「忍びてゆかばといへばそれをいやとはいはぬ女と」以下男と女が対になり、意味も同じ重さ、語の長さも大体同じ、あるいは主語は恋人二人となる。「男に約束深く……」「女も偽りなく……」そして「ふたりが命をかけて」としめくくり、また「女は男の肌着に……」「男は女の下着に……」と順をかえてくり返し「後には恋の詞も盡て逢たばに物はいはず……」と二人を主語とする。巻一の第三「噂塔といふ俄正月」の京の大夫みよし野の花のえんの十太郎への恋心はいかに純正で深く烈しかったとしても完全な片恋だった。読者はつい二話前という近さからこれを思い出さざるを得ない。間にはさまれた「内儀の利發は替た姿」が男女の間のことからは全く無縁だったため、この二話は並んでおかれているとも言えるわけだ。村之助と小督の恋はあれに比べればどれほど幸福だったか痛感される。しかしそれは高い障害を乗り越え、というより二人ともに生命を捨てて「ふたりが命をかけて」得た、そして将来の見込みなどどこにもないという代償を払った恋である。恋人同志の間の完全な平等性が強

調査されたとき、その一方の死が生じた場合、残された者による敵討ちはこの上ない必然性を帯びる。

それにしても血をひとつに絞り出したがい相手の下着に誓いの詞を書きかわすとはすさまじい。たとえ当時の流行だったにしても、この場合エロティックなほど崇高である。この恋の障害がいかに高く、一度一度の逢瀬がいかに危険に満ちていたかを物語ろう。ひき続き「後には恋の詞も盡て逢たばに物はいはず涙に更て別れを惜み」とあるため誓詞などすぐ不用となつてしまい、互いに相手の心は完全に信じているという状態、「逢たばに物はいはず」はそうした究極の段階に達した事を示す。普通それは一瞬にして終るものだろうが、この場合は逢うたびにこれが最後かも知れぬという生命を賭している危機感が持続を許す。「涙に更て別れを惜み」はそれくらい強い強さを持つていると解すべきだろう。「物いひかはして」「闇になる夜を待て」「命をかけて」「かきかはして」「詞も盡て」とたたみかけ、息づまるような切迫した文の調子はここでこの恋の進行を語るにきわめてふさわしい。「わりなく物いひかはして」から「涙に更て別れを惜み」まで、この一文は一直線に疾駆する恋の進行を写すと同時に語り手の息づかいを生々しく伝え、読者の心理を否応なしに同化させる異様な力を持つている。

ところが「別れを惜み」は「次第につのるは此道のならひぞかし」と続く。話者は対象である恋人二人に完全に同化していたと見たのが、ここですつと身を離し、距離を置いてわきから恋人二人を見ている。時間を感ぜさせないほどせつぱつまった恋の描写に最初の「次第に」の語がたつぷりと時間の余裕を与え、此道のならひぞかし」は決して冷淡な態度ではないにせよ、作者西鶴自身とも言つべき年配の第三者が軽い慨嘆と苦笑の調子を含ん

で下している判断となる。そのあとの「情の日数かさなるを天鷲兔の枕より外に知者もなかりしに思ひの種となりて雪中の花に見ながら青梅もがなとなし物すきをして腹臑おかしげになりぬ。」までも同じ調子が続く。これは全く客観的な記述である。

ところでこの文章の弛緩の意味は、語の意味の伝えるところと同じである。互いに命を賭けての必死の恋も成功して何度も重ねられたということだ。一回ごとにこれが最後かも知れぬという逢瀬もたび重なれば不可避的にはりつめた心の状態が多少なりとも弛緩せざるを得ない。「情の日数かさなるを」はこの恋にそうした日常性が付着し始めたことを示す。また「枕より外に知者もなかりしに」とは言わずもがなのとうにわかりきつた事実である。それをわざわざ語られると、無責任な第三者としての語り手の立場が暗示され、心理的緊張緩和が巧みに表現されることになる。少年少女の激しい恋をいかに絶賛しようとも、時間なるもの作用によってそれがいささかでもぐらつくような事があれば、目ざとく感じて表現せずにはいられない西鶴の現実認識の厳しさには驚く外ない。遂に逢びきからの帰路村之助が基平に斬られるのも、逢びきが何度もうまくいったため村之助にある程度油断が生じていたのではないかとわれわれ読者には感じられる。「木陰に待臥して。歸る所を何の子細もなく打て捨」としか書かれていなくてもそれはちゃんと表現されていると言える。

ところでそれより以前、小督に基平との結婚ばなしが持ち上つたときそれを拒否する小督の言葉は多くの事を物語っている。

小督がついていさますして母親に歎きけるは仰をそむくは不幸の第一なれ共。思へばかりの宿の夢と極め仏の道の有がたく後の世を願ふなれば一生夫妻のかたらひ捨て身を紋なしの衣

になし。いかなる山にもわけのぼり執行に思ひ入れれば。甚平様へは外よりよび迎へさせ給へと

結婚などんでもない、私は尼になって生涯を通すつもりですというのは、すでに懐妊の状態にある小督としては外に考えようもない程当然の言い方だろうが、それだけですませてしまふ訳にはいかない。幾度もの逢う瀬を重ねているにしてもそれがいつまで続くかは分からない。この前が最後までもう二度と逢えないのかも知れない。現実にならなかつたが、という一寸先の未来もない宿命的な恋を小督自身が自覚していることがこの言葉からうかがわれる。「思へばかりの宿の夢と極め」の語は、母親を欺くための心にも無いことを言ったのでは決してない。村之助と自分の未来に何の見通しもないとき、この少女は人の世の無情をまざまざと感ずることがしばしばあったに違いない。

そして村之助の死という事態が生じれば二人同時の死しか考えられないから「穿鑿」現場検証・調査 というさわざのとき「是迄と思ひ定め長刀振ていつるを」はこの武家の娘にとつて必然的である。そして村之助の死が甚平に斬られての死という事だから乳母に必死に抱きとめられ「敵はかさねて打品有」との暗示を受けたとき、一瞬にして自死を復讐の決意に変えることも必然的である。敵討の成功に到るまで小督にはいくつもの障害があつた。例えばまず懐妊している子が男か女かで、「もしも女子ならば立所を去らず腹掻切て果べし」の決心は当然である。われわれ読者にはこれほどの烈しい祈念ならばかなえられない事はあるまいと思われる。村之助死後の小督の姿のひとまことに我々読者は作者西鶴の自ら創作した女主人公への思い入れの深さを感じずにはいられない。敵のありかを求めて放浪する小督母子の連吹の尺

八の音に西鶴自身が深い思いを感じ取つたことくにである。

須磨、明石、手習、夢の浮橋など源氏物語の巻々の名が文に籠められ、またそもそも冒頭の状況は「若菜上」の巻末の、柏木が女三宮の姿を見るあの印象的な場面をどことなく想起させることの意味は何か。小督らが逢坂山を越えたとき

勢田の永旅に身を勞し氣を凝し石山寺に参詣して紫式部が源氏の間を長崎の道者開帳し給ふを。結縁に拝て古へはかゝる女も有し世と女の身には殊更に感じて心静に下向するに

とある。これは深い意味がこめられている。まず冒頭部での「若菜上」の想起と以下源氏の巻名がこの作品の文章に纏められていることに気がつかなかつた読者に、紫式部の名を出して念を押しているが、源氏物語の想起は「思ひ入吹女尺八」に何かかくされた意味のあることを教えるものではあるまい。機能としてはただの飾りにすぎない。だがこれは女主人公に対して作者が満腔の共感を抱いていることを示し、しかもそのことを密かに読者に告げようとしているのだろう。「古へはかゝる女も有し世」と小督自身が深く感じているという記述は、浮世草子作家としての西鶴自身が、自ら神の如く尊崇する紫式部に女主人公をなぞらえているのだ。もはや単に勇敢で忍耐強い武家娘ではない。

純粹で激しく深い愛情が、恋人の死と共に不屈不倒の復讐の念となつたとき、多くの偶然がこの女性の味方をした事はほとんど必然とさえ思われる。大谷勘内との出逢いもその最後を飾る。勘内という男が不在だつたなら、またそれとの出合いという事が無かつたなら、この先永い年月を費やしたとしても甚平を探し当てることができたかさえ不明である。勘内は十数年探し続け、今よ

うやくありかを知ってそこへ向かっているというのだから。それで勘内の後見がなかったら少年村丸と女二人がかかったところで「骨骸こつがいたくましく殊ことに大力りき」とされた甚平を打つという事はとても現実的ではなかったであろう。

乳母なる人物の意味するところも興味深い。一体いつから小督の恋を知ったのかなど一切不明である。だが小督の敵討は成就にある役割を果たしているこの女は、小督のヒロイックなほど高く強い性格に感化されてしまった人物だろう。

八

巻二の第一は直前の巻一の第四と重要な共通点がある。この引続いた二話は語り手あるいは作者西鶴自身の作品への強烈な自己投入が明瞭に見られ、作者もそのことを隠していない。しかも作者のその態度は共に純正の人間の讚美と言うべきものである。前者での行動は主君の現在の意志にそむくとは言え公的な大義として認められ、それに反し後者は若い男女二人の恋物語に共感し得る者のみはその正しさを承認する、いわば私的な正義だが、西鶴がいかに技巧の限りを尽くして読者の全的な共感をかち取るように努力しているとしても両者の本質的な相似は変わらない。また「おくりとゞける武士ぶしのやたけぞたのもしき」「朝暮あさゆふの心油断ゆだんなく年月としとひをくくりける武勇ぶゆうの程ほどこそいさましけれ」の巻一巻一の四のあまりにもあからさまな讃辞ではなく「思ひ入吹女尺八いれいふくせんぱちやく」では、文章の表面に現れたのは『源氏物語』への言及を通じてという違いがあるにも拘らずそうなのだ。要するに巻一の第一以来、武士の美德なるものが真実の価値を有するか、を問い続け、なんと么否定し得ぬ場合が確固としてあり得ることを読者に教えたのち、一

転して純粹な恋愛というきわめて人間的、私的な行為を表に出し読者にそれを承認させる。作者の意図のままにあやつられて村之助、小督の恋を讚美するような読者には小督の敵討ほど正しい敵討は『武道伝来記』中他にないとさえ言える程である。巻六の第一巻七の第一等は敵のにくむべき姿が描かれているから読者が敵討の成功を希求する気持が強いのは当然だが、その正しさを読者が承認するのはこの巻二の一が最強なのかも知れない。村之助小督の恋を真実のそして奇蹟的なほど純粹で激しい恋として認めた読者にとっては、小督の敵討はこの恋愛のつづき、いやこの恋愛それ自体としてこの上ない必然性を持つからである。そして小督の恋も西鶴は武家の娘にして初めてあり得たものと見ていたように思われる。生命とひきかえの恋という本質は村之助の死後も最後まで続いているがそれはいかにも武家的な性格の強さに裏打ちされている。巻八の第一と比較すればよく分かる。

第二「見ぬ人貞に宵よの無分別むべんべつ」は第一に見られたこつした性格のすべてがきれいに欠けている。その点こそこの一話の特色である。当然作品は軽く、強い印象に欠けるがその事自体作者西鶴の明白な意図の結果と考えられる。

この一話の特徴は大きく言って二つある。第一に作者あるいは語り手の、テクストに描かれた事件との感情的なかわりがきわめて薄いこと、第二にそれらの出来事にいささか不自然と言えるようなことがらが多い点である。第二の点をまず取り上げる。これを考えていけば第一の点の理解に資すると思われるからである。

この点は一話の後半に多い。列挙して見る。福崎重平に討たれた善連寺外記が、和田林八と口論の末斬合になった第八九郎の前に亡霊となつて現れ、喧嘩をやめぜむ敵を討つてくれと言いい残し

て消える。このような超自然の現象は『武道伝来記』に他に見出されない。いや巻三の第二「按摩とらする化物屋敷」があるが、これは亡霊出現とは全然違う。超自然の現象などでは毛頭なく、怪異とさえ言えるかどうか。それにこの挿話は話の本題とは全くつながりがない。それに反し外記の亡霊はこの話の鍵となる重要な役割を果す。これほど都合のよい設定はない。外記の亡霊が出現する必然性は次のようなものである。八九郎と林八は親友同志だが今は刀を交え「切先より火を出ししにぎ削てあやうき時」という状態にある。敵を討たす者は八九郎よりいいわけだが、当人の亡霊でなく例えば急ぎの使がかるうじて間に合ったというのでは「兩人眼前に驚きしばし十方にけれけるが」という結果になったかどうか。かまわず斬り合いを続けたかも知れない。それに亡霊出現の舞台としておそらくこれは決して常套的ではなく、冬の山中「山は雪に埋み」「鳥の聲なく風あらく」という背景は、考えようによってはいかにも亡霊の出現にふさわしいとも言える。しかしあまりにも都合のよい設定だから、いかがわしいとまでは言わぬにしても何かふと怪訝な思いを読者は軽く感じてしまう。幽霊の存在を固く信じている者にとつても、これは作品全体にまともな相手にするには何かためらわれるような性格を与えている。巻二の一、巻一の四のみならず武道伝来記のこれまでの五篇のすべてが、もし亡霊が出てくる場面があったとしたら作品の緊張が一遍に解け、ごく気楽でユーモラスな気分さえ一話を支配したであろう。

外記の亡霊が出現しなければどちらかが討たれたはずだったというのに、事情を知った林八が八九郎を元気づけ助太刀となつてもる共に一年あまりも敵軍平のありかを求めて国々をめぐり歩いたというのは、異様ではあるが決してあり得ぬことではない。

美しい友情物語である。だが最初の熊野山中の喧嘩の発端となつた八九郎の言動、

日比口ほどにもなき男今から其ごとく腰ぬけてなを行さきの
峯はいかにしてこゆべきやと手を打て笑ひ此度の参詣も汝思
ひ立ゆへにつれ立たるかひぞなき。小者にあれまでかたに
かゝれ

はきわめて写実的と言えるが、多少意地悪が過ぎているようにも思える。外記亡霊の出現がいささか都合のよすぎる安易な設定なので、その他の点ではリアリティーを生む事に努力しているのかも知れない、とさえ考えられる。へとへとに疲労困憊していたはずの林八が斬り合いになると対等の力を発揮している点、これもよく考えてみれば現実にはいかにもありそうだと言える。ちよつと目には不自然に見えても、いかにも現実にはこつこつ事はしばしばあるのだと言ひ得る事柄はこの一話、特にその後半に満ちている。

その点最も注目されるのは福崎軍平の言動である。

軍平道傳と名をかへ世をのがれたる墨衣佛もなき草庵をむす
びひがしの山はらに黙然として年月をおくるはさらに仏心に
はあらず徳病風に引籠り世上をおそれての山居そかし。

というのはそれほど奇妙ではない。武芸の達人のこの臆病ぶりは自分は天の助けるところではないと自覚している者にはあり得る事だつたらう。「黙然として」の語がきわめて効果的である。この語は八九郎と林八に踏み込まれた時の軍平の「手を合せ降参し

て今はこの身になりて外記殿の御跡を吊らひければ命をたすけ給へといふ。「滑稽という外ない姿に直結している。それよりも八九郎と林八に「さあ立あがれ」としきりに挑発されてこれほどとも逃れられぬと遂に槍を手に取ったときの

鐘を取手を打おとせば。かひぐ敷も打おとされし手を左の手にもち林八が助太刀を打おとし林八を切ふせる所を八九郎とびかゝり切倒し

というのはどうであるう。軍平はきき腕の右手を切り落とされたのに、左手でその右手を広い上げ、それを武器にして林八の刀を打ち落し、その刀を左手に拾って林八を切ふせたところへ、八九郎が切りかかって討たれてしまったというわけである。全体が一瞬の出来事だろ。武芸の達人にはこんな事もあるのか。今日では適確に判断できる者はいるまいが。しかしやはりどこかに不自然なところがありそうにも感じられる。八九郎の動作がほんの少し遅かった事は言えそうだが林八の死をあれほど歎きながらその事を反省している様子は無い。

なんだか変だがよく考えてみれば必ずしも不自然とはいえないという事柄も、ごくたまに書かれるなら、これこそ真の現実を写したものと読者の感歎をさそうかも知れないが、このように短い一篇で次々に出てきたときは、逆に作品そのものがいささか嘘っぱちな感帯びてしまう。特に本篇のように最も大事な一点で亡霊の要素を利用してはいるようなときはそれは避け難い。西鶴はそうしたことすべてよく承知していただろう。

外記の死までの記述には妙な点は無さそうである。特に玄春後家の姿は適確に描かれている。おたねと婚禮の日、世に又もなき

美女のように玄春に思い込ませられていたおたねが現実にはとんでもない醜女だったと知って憤慨した軍平が、あれを即刻外記のもとへもどせと命じたとき、妙春は「挟箱の蓋をあけて金子貳百兩取出して」「このお金はあちらのお宅が御裕福ですから送ってこられたのですと言う。」「今の世の中はかうした事が勝手つく女房がよいとて御身躰のたよりにほなりません。御ためのあしき事はいたさぬといかめしく見せければ。」「はいかにも俗っぽい中年過ぎの女性の様子である。氣取ってはさみ箱のふたを開ける様子が目に見える。二百兩で軍平が納得するという自信があつたのだらう。軍平が「たまりかね」るのも当然だ。このようなくれた点がこの一話には乏しくない。外記の亡霊の出たのが白昼雪の山中だったという、考え方によつては卓抜な発想もそのひとつだらう。

にも拘らず最初から読み進めてきた時にこの一篇急激な力の落ちこみを感じさせる。それは特に直前の二篇、巻一の第四と巻一の第一にあつた作者自身と作品に書かれた内容との密接な心理的つながりがこの一篇にはほとんど無いからである。作中人物の何びとも読者の人間的な関心を深くとらえはしない。だから皆なんとなく滑稽なだけだ。八九郎が林八の死骸にすがつて歎き悲しんだと知つても読者は何ら同情心を動かされない。それが作者西鶴の強い意図だった。読者は熊野山中での八九郎が林八に浴せた汚い悪口とその揚句の必死の斬り合いを思い出すが読者の心中には皮肉に満ちた滑稽さが浮かぶだけだ。おたねという女性こそ真に同情に価する人物と思われるが、西鶴はこの女を中心の作中人物の一人とならないよう注意深く努力しているようである。前の巻二第一で美女小督が女主人公だったというのに醜女はそうならなというのには西鶴の偏見ではないかと非難してはなるまい。本篇

では誰も読者の同情をひいたりしない事が作者の根本的意図だったのではないか。

谷脇理史氏は『武道伝来記』諸篇には武士のあり方を諷したのもあると主張し、その例とし、本篇を上げている。この作品には、「無分別で卑劣な軍平を批判する視点が明確に存し、そのような武士のあり方を諷したものと見ることに問題は無いであろう」⁽³⁾これは貴重な指摘である。冷笑的というほど批判は強くないにせよ、この一篇での作者の精神的態度は醒めて冷静、且つ意識的だから、おのずと風刺に近いと言えるだろう。ただし諷されている対象は、軍平また武家の婚姻の風潮だけでなく、八九郎林八も含まれていよう。なお念のため言っておくと、巻一の三に武家倫理への強烈な批判はあったが、それは同時に当の武士たちへの深い同情・憐憫と共にあり、両者とも作品の表面から隠されながら、悲痛とも言うべき感覚さえ生じていた。あれは決して風刺ではない。

好篇巻一の第三を経て、巻一の第四、巻二の第一と作者自身の気分の高まりと主人公たちへの二様の讃歎がうかがわれる二篇が続いたあと、来るのは作者のあくまで冷静な態度の徹底した諸篇だという事はいわば当然か。しかも三十二篇で現実を写すことを考えるならば、巻二の第二でこれが終るはずもない。現実世界に生起することは巻一の第四、巻二の第一のような出来事はきわめて稀で、多くはもっと空しく物悲しい。『武道伝来記』で作者西鶴の気分が高まるような事はもう見られず、作者と作品との内面的つながりの感じられる各篇は、憤怒のほかはすべて深い観想といったものとなる。

注

(1) 俗世にもまれて謂わば一倍すれつからしになってしまい、さまざまな男女の仲のあり方など知り尽くしているような作家は、自分自身にはとうに不可能となつてしまったこのような年少の男女の直情的激情的に灼熱する恋を、めつたに生じぬ純粹な恋として讚美する傾向がある。例えばスタンダーは『恋愛論』で真の情熱恋愛の発生には一度にわたる結晶作用とか、疑惑とかその間のある長さの日時とか、いろいろうるさく条件を設けているが、それは遊治郎たる自分自身が社交界なる特殊な場で現に体験中の恋愛について書いているからである。彼が後に書く、イタリア、スペイン等を舞台にした諸々の短篇小説ではそんな条件にしばられずに激しい情熱がいくつも書かれ、当の『恋愛論』の中でさえ、マホメット以前のアラビアの砂漠での灼熱する恋愛が、今日では不可能な恋愛の理想像として称揚されている。

(2) (小督は)武家の娘として生まれたがために、愛を理不尽に踏みじられると、その愛を貫くために、敵討ちに一生をかける。西島孜哉『近世文学の女性像』世界思潮社 一九八五年 一一五頁。

(3) 谷脇理史『西鶴 研究と批評』若草書房 平成 年 九四頁。

平成十年十一月稿

(未完)